

百草八幡神社境内採集の中世瓦

小黑 恵子（日野市ふるさと文化財課）

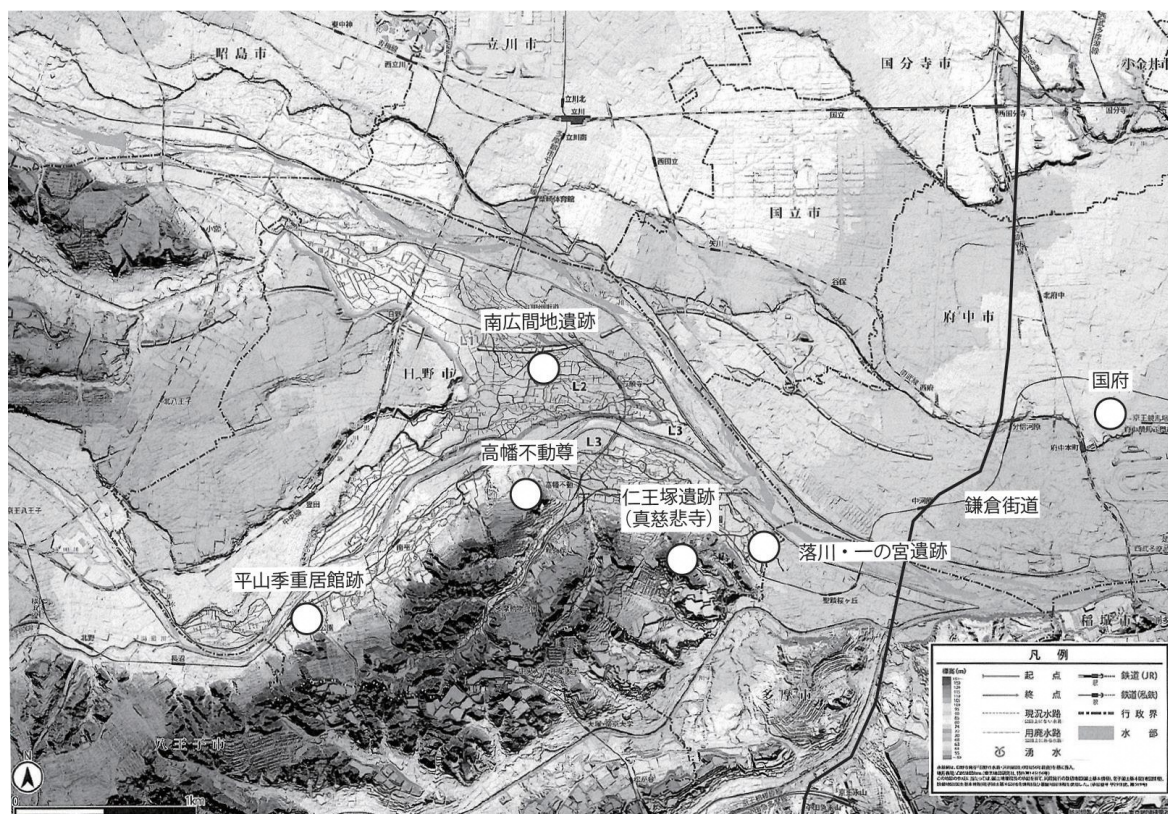
はじめに

令和4年5月に百草八幡神社氏子会役員から、境内清掃中に瓦を見つけたという連絡を受け実見したところ、一見して中世の瓦であることがわかった。役員と共に周辺を探索した結果、軒丸瓦2点、軒平瓦1点、丸瓦5点、平瓦23点など31点が採集された。他に過日境内でやはり清掃中に拾っていたという平瓦2点を加えて33点を確認することができた。百草八幡神社北側隣地の京王百草園内では平成元年に13世紀代の瓦が大量に出土しており、この時出土した瓦は平安時代末から鎌倉時代にかけてこの地にあった真慈悲寺に葺かれていた瓦と考えられている（日野市遺跡調査会1993・1998）。今回、新たにもたらされた瓦の大部分は、真慈悲寺に葺かれていた瓦とは異なる文様や技法で製作された新出の瓦である。

1. 真慈悲寺と百草八幡神社の概要

真慈悲寺と百草八幡神社は多摩丘陵の北の突端、多摩川をへだてて武蔵野の平野を見透かす眺望の良い場所に位置している。標高は150 mほどを測る（第1図）。

真慈悲寺は平安時代末から鎌倉時代に現在の京王百草園周辺に存在した寺院で、京王百草園を谷頭として東に開く新堂が谷戸周辺の丘陵一帯を寺域としていた（第2図 註1）。資料上に現れる最も古い真慈悲寺の記述は11世紀末に遡る（清野利明1996b、澤田輝男・田中誠



2018)。承暦三年（1079）の銘をもつ『聖閻漫徳迦威王立成大神驗念誦法』（『平安遺文』401号文書）の奥書に「承暦三年十一月十四日真慈悲寺仁天受讀了 僧長嚴」とあり、これが現在確認できる最古の記録となっている。12世紀になると、寺域内にある小名仁王塚という地点で経塚が複数造営されるようになる（第2図、註2）。また、『吾妻鏡』の文治二年二月三日条、建久三年五月八日条の2か所にも真慈悲寺の名がみられる。この『吾妻鏡』の記述から真慈悲寺が鎌倉幕府の祈禱寺となり、その6年後には後白河法皇の四十九日の法要に僧侶3人を派遣するような寺格を有していたことがうかがわれる（峰岸1994）。さらに京王百草園内では5,000点近くの中世瓦が出土しており、13世紀中ごろから13世紀後半に比定されている。特に13世紀後半の瓦を葺いた堂宇は総瓦葺きであったことが判明している（日野市郷土資料館2013）。

また、京王百草園の南隣に位置する百草八幡神社の起立は不詳であるが、源頼義・義家が前九年・後三年合戦の折に戦勝祈願をし、帰途に再度立ち寄って神社を再興し数々の品を納めたとの伝承をもつ（註3）。百草八幡神社に伝来している国指定重要文化財の阿弥陀如来坐像（建長二年（1250）造立）の背銘には「日本武州 多西吉富 真慈悲寺」の文字が刻まれており、



第2図 真慈悲寺の立地（黒枠内：仁王塚遺跡範囲）

13 世紀半ばに比定されている瓦の出土と相まって、真慈悲寺の存在を示す重要な資料の 1 つとなっている。

真慈悲寺と八幡神社は神仏習合の時代にあって、京王百草園内に総瓦葺きの真慈悲寺の本堂が、南に約 100 m 離れたやや高い位置に八幡神社が共に東を向いて立ち並んでいたと想定され、多摩川を挟んで対岸に位置している武蔵国府から眺めると、西方浄土の方角にある小高い丘の上の霊場として機能していたと考えられる。

しかし、鎌倉時代には幕府の祈祷寺として、また八幡神社の別当寺として発展した真慈悲寺であったが、幕府滅亡以降の資料は今のところ全く見つかっておらず、幕府の滅亡と期を同じくして廃寺となったと考えられている。江戸時代には真慈悲寺跡に栴井山松連寺と慈岳山松連寺が建立され、これらの寺院を別当寺として八幡神社はその後も存続し続け、廃仏毀釈で慈岳山松連寺が廃寺になったあとも今日に続いている。

2. 採集瓦の特徴

全 33 点中、4 点が真慈悲寺のⅢ～Ⅴ群に相当する 13 世紀後半の瓦（日野市郷土資料館 2013）で、残り 29 点がⅦ群（第 7 図）として新しく分類した瓦である。29 点の内訳は、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点、丸瓦 4 点、平瓦 22 点である。このうち今回は特徴的な瓦 9 点を図示した。なお、実測図と拓本は縮尺 1/3、写真は任意の大きさである。

軒丸瓦（No.1）第 3 図

瓦当部の約 1/2 が残存。瓦当の直径は 11 cm で真慈悲寺の瓦当部の直径が 15 ～ 16 cm であるのに比べると小型である。周縁部の幅は 12mm でほぼ一定、ナデで調整されている。顎の厚さは 15 mm。薄く煤をかぶる。右回り三巴文で、巴の頭は丸くて太く、尾にかけては背の部分にしっかりした稜線が作り出されている。圈線は廻らず、割れ口にかかって 1mm 程度のごく小さな珠文が 2 個、少しの間をおいて小さな珠紋が潰れて扁平になったものが 3 個並んでいる。本来、3 個一組の珠紋が間を置いて廻っているものと考えられる。離れ砂が見られる。瓦当面の粘土断面はミルフィーユ状を呈する。筒部と接合するための溝が瓦当裏面の上部直下から穿たれている。顎裏は指頭による押さえの成形痕が残る。胎土は全体としては混ざりものが少なく精選されているが、1 mm 以下の白い粒子をごく僅かに含む。約 1 cm の小石が周縁部に 1 点入り込んでいる。焼成は軟質で、にぶい黄褐色を呈する。

以前に、百草八幡神社境内では、圈線のない左回りの三巴文軒丸瓦の瓦当の一部が 2 点表採されている（第 7 図Ⅵ群）。直径 9mm の大きな珠文 2 個が単位となっている。Ⅵ群も瓦当直径 11 cm で、小型という点ではⅦ群と共通するが、胎土は緻密で焼成も良好であり、Ⅶ群の瓦とは別系統のものである。

丸瓦（No.2）第 3 図

筒部上半部から玉縁部にかけての約 1/2 が残存。筒部直径 11 cm で軒丸瓦の値と一致する。凸面の筒部上部には縄タタキ痕が広く残る。筒部上端と段部の間を指でつまんで横方向にナデで成形している。凹面には部分的に布目痕残り、吊紐痕は見られない。左の側辺側には縦方向に布袋の食い込んだ痕跡が筒部から玉縁部にかけて深く数条残っている。玉縁部側辺と筒部

側辺の端部はケズリで平坦に整えている。さらに筒部ではその内側にもう一度ケズリを入れている。焼成は軟質で褐灰色を呈する。

軒平瓦 (No. 3) 第4図

平瓦部約1/2と瓦当部上縁部の約1/2が残存。瓦当面に僅かに陽刻の下向き剣頭文が一部残っている。剣頭文1単位の幅は25mmで剣刃を共有し中央に鎬がある。陽刻は丸みを帯びた太い線で表現されている。瓦当の厚さは15mmで、平瓦凸面との角度はほぼ90度である。接合部の顎裏には薄く粘土を張り横方向にナデている。瓦当上縁部の上は横に軽くナデており、親指と人差し指で三角形の面を作りながら側辺部へむけてつまみ上げている。現状では瓦当部の成形技法については資料が少なく、瓦当貼付けとも一部折り曲げとも明確な判断ができない。類例の増加を待ちたい。

平瓦 (No. 4・5・6・7) 第4～6図

VII群平瓦の製作技法には2種類が観察される。No. 4・No. 7は真慈悲寺の平瓦ではまったく確認されたことのない特徴を示している。凸面には、指頭による連続した粗いナデの圧痕が縦もしくは斜め方向に全面に残され、表面は大きく波打ったままである。表裏共に多量の離れ砂が付着しているが、凹面では丁寧なナデ調整のため指頭圧痕は目立たず、糸切り痕や布目痕も見られない。No. 7は凹面の左側辺に沿って粘土の折り返し部分が未調整のまま残されている。

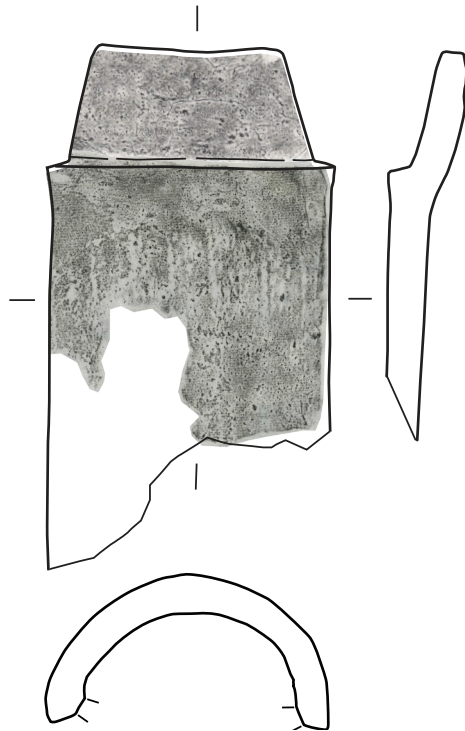
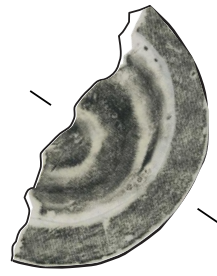
一方、No. 5・No. 6は陽刻の斜格子タタキ痕を残す平瓦である。No. 5は凹面に反転した斜格子タタキ痕が深く残る。凹面下辺に沿ってナデで薄く水切りが作られている。下辺端部もナデ調整。また、右側辺にもごく軽いナデがおこなわれて角を丸めている。凸面は残りが悪いがナデにより調整されている。No. 6は凸面を陽刻の斜格子タタキで調整しており指頭圧痕は残らない。凹面はナデによりきれいに整えられているが、注意して観察してみると浅い反転の斜格子タタキ痕を見ることができる。No. 5・No. 6ともに両面に多量の離れ砂が付着している。

この2種類の平瓦の胎土に大きな違いはない。No. 4・No. 5・No. 6の焼成は軟質、酸化焰焼成で鈍い橙色を呈する。No. 7の焼成は不良で軟質、褐灰色を呈する。

以上、VII群として分類した瓦の説明をしてきたが、京王百草園で大量に出土したIII～V群に相当する瓦4点がほぼ同じ地点で採集されている。No. 8はV群に分類される平瓦で厚さが22mmと厚い。表裏共に多量のキラキラ光る鉱物を含んだ離れ砂がまかれており、ナデで器面が整えられている。下端面および水切りは、鋭利な工具で一気に削られてシャープな平坦面をみせる。凹面側の側辺は軽く一気にナデて角を落としている。凸面側辺際には幅1cmの明瞭な凹型痕が残る。明黄褐色を呈する。No. 9はIII群の丸瓦の筒部中位の破片で厚さ24mmを測る。凹面には太い吊紐痕が大きく垂れ下がっている。褐灰色を呈し、焼成は硬緻である。

3. まとめ

総じて、今回八幡神社境内で採集されたVII群の瓦の大きさは、平瓦、丸瓦ともに真慈悲寺の瓦に比べてサイズが小さく、厚みが薄い。胎土は比較的精選されており、小石や粘土塊などの混ざり物が少ない。酸化焰焼成でぶい褐色を呈するものが多く、焼成は軟質である。一部に

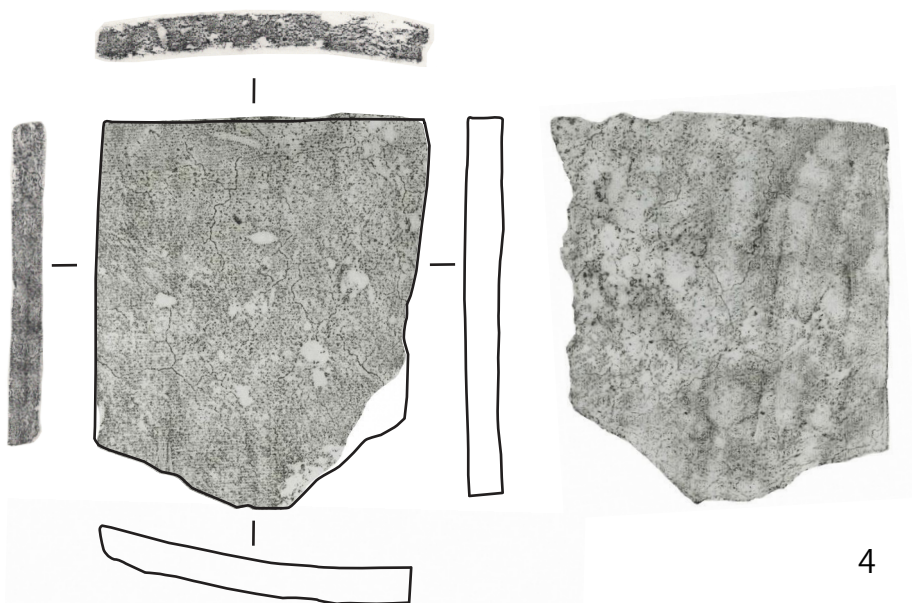
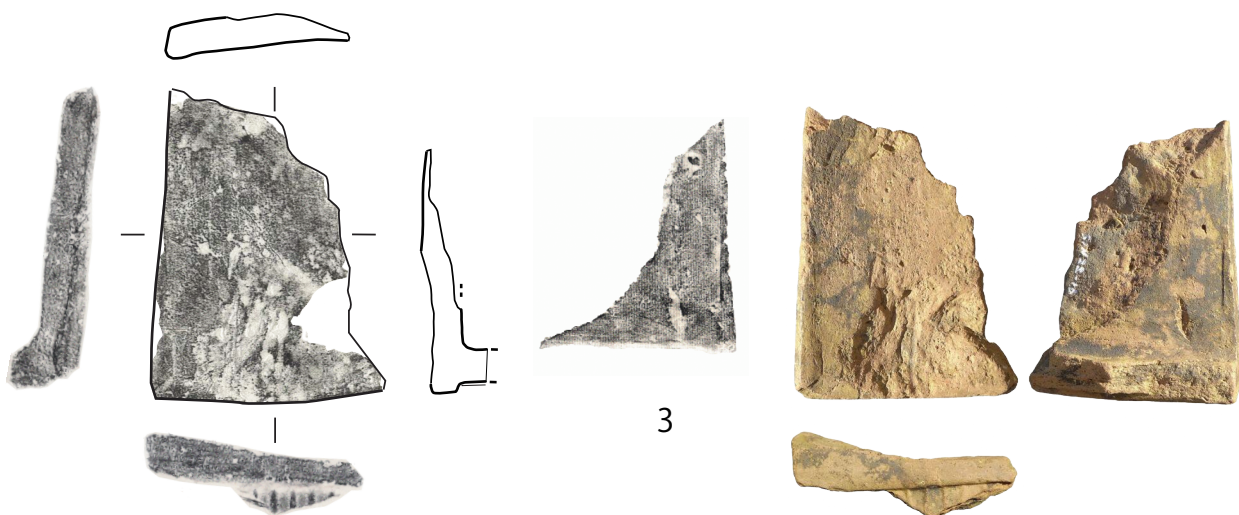


2



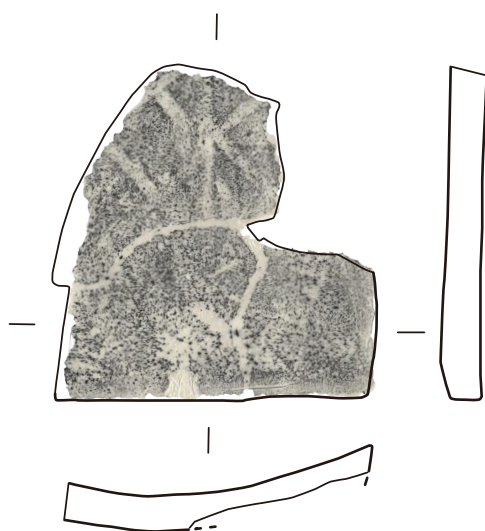
0 1/3 10cm

第3図



0 1/3 10cm

第4図



5

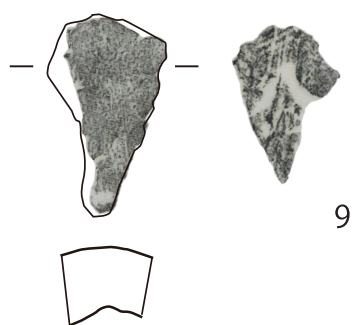
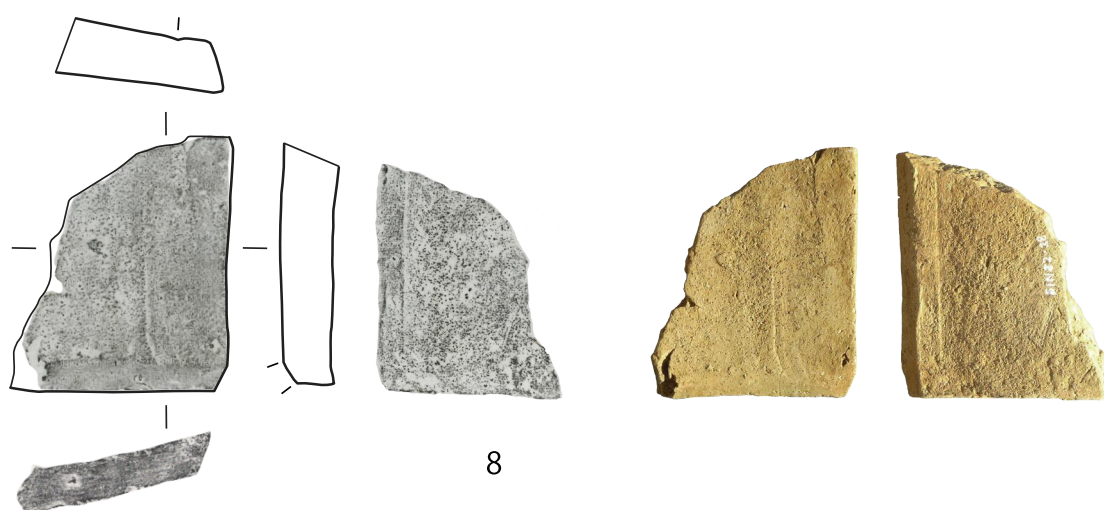


6



0 1/3 10cm

第5図



0 1/3 10cm

第6図

褐灰色を呈する瓦もあるが、より焼成があまい。多くが被熱しており、煤やタール状の黒色付着物がついている。断面には煤が付着していないことや、軒平瓦の瓦当面にも煤が付着していることから、建物に葺かれている段階で火を受けた可能性が考えられる。

極小の珠文をまばらに配置する軒丸瓦、凸面の指頭圧痕による凹凸をそのまま残す平瓦や、剣刃を共有する陽刻下向き剣頭文の軒平瓦などは今回初めて確認された。これまでは、13世紀前半の「連珠文軒平瓦」と、周辺に類例をみない真慈悲寺に特徴的な13世紀後半に比定される「蓮華唐草文軒平瓦」のみが出土しており、13世紀代に相模や南武蔵周辺に広く分布する「剣頭文軒平瓦」が出土しないことが特徴となっていた。今回初めてこの種の瓦が確認されたことで、周辺地域との比較検討が可能になってきた意義は大きい。

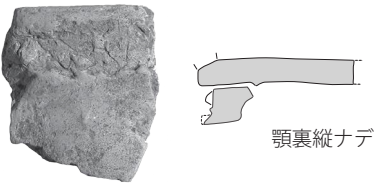
また、Ⅶ群の瓦が百草八幡神社拝殿南脇のごく狭い範囲のみから集中して採集されており、広範囲にわたる真慈悲寺寺域内でのこれまでの確認調査では全く見つかっていないことから、この瓦が百草八幡神社の建物に葺かれていた可能性が高いと考えられる。所属時期については、現状では資料が少なくはっきりしたことは言えないが、軒瓦の類例を称名寺（金沢文庫）KHⅡ 01-a・KHⅡ 01-b・SM04、鶴岡八幡宮HNⅡ 06、鎌倉極楽寺Ⅱ -a類などに求めて13世紀末から14世紀初頭と捉えておきたい。今後、採集地点で発掘調査を実施し、更なる資料の蓄積とともに瓦の出土状態を明らかにすることが急務と考えている。

【註】

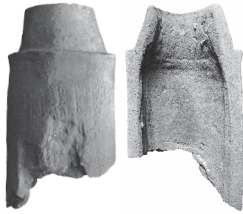
- 1) 真慈悲寺の寺域の大部分は経筒出土地点の小名から仁王塚遺跡として指定されている。これまでに京王百草園内、百草八幡神社周辺、東京電力総合研修センター周辺にて数次にわたり確認調査が実施されている（日野市郷土資料館 2017）。
- 2) 『武州多摩郡百草村榊井山正八幡宮伝記』『多波の土産』『新編武蔵風土記稿』『江戸名所図会』『武蔵名勝図絵』など江戸時代に書かれた多くの地誌に経筒出土の記載がある。5口の経筒の内、長寛元年（1163）、永万元年（1165）、建久四年（1193）銘の経筒が現存しており、現在、奈良国立博物館に東京都松蓮寺経塚（仁王塚）出土として収蔵されている。
- 3) 「武州多摩郡百草村榊井山正八幡宮伝記」2014 日野市郷土資料館、『新編武蔵風土記稿』1830 年など。

【謝辞】

この原稿をまとめるにあたり、百草八幡神社氏子会、真慈悲寺調査ボランティアの方々にご理解・ご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

			軒丸瓦	軒平瓦	顎部成形技法
京王百草園出土(真慈悲寺)	十三世紀中頃	I 群	—	—	—
		II 群	 圏線なし 左巻き 三巴文軒丸瓦 大きな珠文	 連珠文軒平瓦	 顎裏縦ナデ 顎貼り付け技法
	十三世紀後半～末	III～V 群	 圏線あり 右巻き 三巴文軒丸瓦 小さな珠文	 蓮華唐草文軒平瓦	 凹型台痕 瓦当貼り付け技法
百草八幡神社出土	—	VI 群	 圏線なし 左巻き 三巴文軒丸瓦 大きな珠文2個1単位	—	—
	十三世紀末～十四世紀初頭	VII 群	 圏線なし 右巻き 三巴文軒丸瓦 極小珠文3個1単位	 陽刻下向き剣頭文	—

第7図 瓦の特徴一覧

丸瓦	平瓦	タタキ痕
 玉縁に吊紐なし 筒部に平らな吊紐二段	 凹面 丁寧なナデ 凸面陽刻 斜格子タタキ痕	 凸面陽刻 斜格子タタキ痕(二種類)
 玉縁に吊紐なし 筒部吊紐不明	 凹面 丁寧なナデ 凸面 凹型台はみだし痕	
 玉縁に吊紐一段 筒部に波形吊紐二段	 凹面 ナデ 凸面 凹型台痕 (幅5ミリのバリ)	 凸面陽刻斜め平行タタキ痕
 玉縁に吊紐なし 筒部に吊紐なし	 凹面 ナデ 凸面 指頭による顕著な押さえ	 凹面反転 斜格子タタキ痕 凸面陽刻 斜格子タタキ痕

【参考文献】

- 小黒恵子 2007 「京王百草園（推定「真慈悲寺」跡）出土中世瓦の研究Ⅰ－軒平瓦について
の中間報告－」『日野市郷土資料館紀要』第3号（通巻第11号）日野市教育委員会
- 小黒恵子 2014 「真慈悲寺推定地出土の中世瓦について」『多摩のあゆみ』153号 たましん
地域文化財団
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1988 『金沢文庫遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告19
- 鎌倉市教育委員会 1985 『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』
- 清野利明 1993 「真慈悲寺研究略史」『真慈悲寺の研究』多摩の古代・中世を考える会
- 清野利明 1996a 「梵鐘に刻まれた蓮華唐草文と瓦」『貝塚』51 物質文化研究会
- 清野利明 1996b 「真慈悲寺の深淵を探索（上）平安遺文401号文書を中心として」『日野の
歴史と文化』第43号 日野史談会
- 清野利明 1998 「京王百草園出土「蓮華唐草文と平瓦」の年代観」『京王百草園内三椽庵移築
工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－仁王塚遺跡－』（日野市埋蔵文化
財発掘調査報告57）京王帝都電鉄株式会社 日野市遺跡調査会 日野市遺
跡調査会編
- 清野利明 2010 「真慈悲寺推定地出土の中世瓦～佐渡配流の日蓮が視た甕～」『幻の真慈悲寺
を追い求めて』日野市郷土資料館
- 今野慶信 2007 「関東御祈禱所について」『シンポジウム幻の真慈悲寺を追う』《発表要旨》
多摩地域史研究会
- 澤田輝男・田中誠 「『聖閻曼德迦威怒王立成大神驗念誦法』と真慈悲寺」2018 『幻の真慈悲
寺を追い求めて』Vol.2 幻の真慈悲寺調査ボランティア編
- 多摩の古代・中世を考える会編 1993 『真慈悲寺の研究』
- 中世瓦研究会 2000 『東京の中世瓦』第7回中世瓦研究会資料集
- 中山弘樹 2006 「京王百草園（推定「真慈悲寺」跡）出土中世瓦の研究Ⅰ－丸瓦についての
中間報告－」『日野市郷土資料館紀要』第2号（通巻第10号）日野市教育委
員会
- 日野市遺跡調査会 1993 『京王百草園の発掘調査－幻の真慈悲寺を探索－』（日野市埋蔵文
化財発掘調査報告14）
- 日野市遺跡調査会 1998 『京王百草園内三椽庵移築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
－仁王塚遺跡－』（日野市埋蔵文化財発掘調査報告57）
- 日野市郷土資料館・多摩地域史研究会 2007 『幻の真慈悲寺を追う』シンポジウム資料
- 日野市郷土資料館 2010 『幻の真慈悲寺を追い求めて』幻の真慈悲寺調査ボランティア編
- 日野市郷土資料館 2013 『武州多西吉富 真慈悲寺推定地出土の中世瓦』
- 日野市郷土資料館 2014 「武州多摩郡百草村榑井山正八幡宮伝紀」『東京都日野市 百草観音
堂および百草八幡神社の文化財調査報告書』
- 日野市郷土資料館 2017 『仁王塚遺跡－幻の真慈悲寺調査事業推進プロジェクトに伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書－』
- 日野市郷土資料館 2018 『幻の真慈悲寺を追い求めて』Vol.2 幻の真慈悲寺調査ボランティア編
- 峰岸純夫 1990 「武蔵国吉富郷真慈悲寺」『地方史研究』227 第40巻5号
- 峰岸純夫 1994 「日野市域の荘園と公領」『日野市史 通史編二（上）』日野市史編さん委員会

- 峰岸純夫 2010 「鎌倉時代における安達氏と小笠原氏の連携—女性と寺社の視点から—」『近藤義雄先生卒寿記念論集』
- 峰岸純夫 2018 「祈祷の霊場武蔵真慈悲寺」『幻の真慈悲寺を追い求めて』 vol.2 日野市郷土資料館

日野市ふるさと文化財課紀要 第1号

令和5年3月31日発行

編集・発行 日野市ふるさと文化財課

〒191-0016 東京都日野市神明4-16-1
Tel : 042-583-5100 Fax : 042-584-5224
Mail : bunkazai@city.hino.lg.jp